

---

# 東西南北物語

karon

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東西南北物語

### 【Nコード】

N1073Z

### 【作者名】

karon

### 【あらすじ】

四つの街の境界線のある十字路。その角一つ一つに四つの高校があった。書類上はそれぞれ別の街。一つの街に一つの高校。

その高校は何故か怪奇現象が頻発する。そんな高校生活物語。

とある十字路にて（前書き）

更新遅いかもしれませんがよろしく。

## とある十字路にて

その十字路にはそれぞれ四つの高校があった。

東に東村高校。西に西部高校。南に南十字星高校。北に北斗女学院。何故こんな隣接した場所に四つも高校があるのか、それは、この場所が、四つの地区のちょうど境界線に立っているから。

十字路がちょうど境界線。その向こうは別の地区。だから四つの地区に四つずつ高校がある。それだけの話だった。

お役所仕事とはそんなもんである。

しかし、すぐ隣同士に高校がある以上、生徒の交流や生徒会同士の付き合いも密接にならざるを得ない。

それは、そんな学園の物語。

その学園では、怪奇現象が時々起きる。

あまりに頻繁に起きるので、春に新入生の悲鳴が聞こえるようになったら、ああ、もうそんな季節か、と誰もが呟く。春の風物詩。

## 東村高校生徒会

諸星かほるは新入学早々生徒会から呼び出しを食らった。

中学生時代はやんちゃで鳴らした彼だが、今のところおとなしくしていた。

生徒会室には、すでに先客が並んでいる。

生徒会の椅子に、いかにも真面目そうな眼鏡の生徒会長。

そして、その前に、いかにも風紀違反の見本帳といった連中が雁首並べている。

かほるは、茶髪をばさばさにきっただけと言う髪形をした男の横に立った。

その横は、いかにも不精で髪を伸ばしましたという中肉中背の口ン毛だ。

その顔は細いのだろうけれどひたすら長い前髪にさえぎられて、その目が一重なのか二重なのかもわからないという有様だ。

そして、横の残薔薇は、黙って立っていればいい男なのだろう。その無造作にはさみを入れすぎた髪形も、ニューカットといっても通じそうな、すでに改造が入った学ランも愛嬌だ。

それに引き換え、自分のまともすぎる格好を見て、かほるは違和感を覚えた。

自分は征服を改造していないし、髪形も、野暮つたいが至って普通だ。

それが何で、呼び出しを食らったのだろうか。

「全員そろいましたね」

生徒会長は黒ぶち眼鏡の縁を持ち上げ、手にしていたリストを机に置いた。

「本日より、来期生徒会役員候補の選考会を行います」

その場にいた全員がずっこけた。

「本日より、来期生徒会任命式までの期間がタイムリミットです。

その間に、生徒会役員を選ばせてもらいますのであしからず」

こけていた床から立ち上がりながらかほるが尋ねる。

「選考会って何をするんですか」

「それは内緒です」

生徒会長はニタリと笑った。

## 他の学校の生徒会

ざんばらは諸牙狼、不精ロンゲは五十嵐博次といった。

なんとクラスメイトだった。

面倒で、クラスの人間の顔をよく見ていなかったのだ。

五十嵐はともかく、諸牙は名前が近いのですぐ前の席に坐っていた。

今のところ、選考会の候補選びの古い落しらしきものは行われていない。

クラブ活動も今のところしていないので先輩の知り合いもいない。だからこれが恒例行事なのかもわからない。

ただ、なんとなく三人でつるむようになった。

いかにも不良といった風貌の狼はクラスでも浮いた存在だったが、それとつるむようになってかほると博次も巻き添えで遠巻きにされるようになった。

他の選考対象とはさして話をしたこともなく。このまま何もかも忘れられて平穏な高校生活を送れないかと、かほるは考えていた。

放課後、文房具店で買い物を買わせてふと背後を振り返ると、小学生のように小柄な少女が立っていた。

まん丸の顔にツインテールの少女が小学生ではないのは、北斗女学院の制服。紺に紅いラインのセーラー服姿だったので同年輩とわかったのだ。

少女はかほるを見て戸惑ったような顔をした。しかし、同じように買い物をしていた五十嵐が、少女に駆け寄った。

「博次知り合いか？」

学ラン姿の博次は、少女と何事か話しをしたあと、振り返った。

「単なる幼馴染」

この界限は文房具屋が多い、そして次に多いのが軽食を出す店だ。

おにぎり、ピザ、ハンバーガー、クレープなどなど、多彩な顔ぶれはやはり土地柄というものだろうか。

ちなみに西部高校は、チエックのブレザーだ。

とはいえ近いので、学校の垣根を越えて友人関係を気付く連中も多い。だから博次と北斗の生徒の交友関係もありふれたものだが。

彼氏彼女には見えない、なら博次の言うと折り単なる幼馴染なのだろうか。そこまで考えてかほるは髪を引きむしる。

まるででばがめじゃないか、別に博次に彼女がいようがいるまいが関係ない。

博次は数分立ち話をしてすぐに離れた。

少女は、背後にいた長い髪の少女二人のもとに駆けて行った。

そのうちの一人に既惚感があった。

「何でも、あいつも生徒会役員選考に入ったそうだ」

博次がそう言った。

「どうやら東村だけじゃない。この四つの高校すべてが、選考会という形で生徒会役員を決めているらしい。

博次はさも呆れたという気持ちを隠さないうそ言った。

「あのさ、右側の女の子どっかで見たことなかった？」

「名前も聞いたよ、火乃宮一実さんと、諸牙葉月さんだと」

その名前に唐突にさっきの感覚の理由を理解する。

狼に似ていたのだ。



玄関を出たらそこは草原だった。

それはいつもと変わらない放課後のはずだった。

しかし、玄関を出ればそこは草原だった。

そして、背後を振り返れば、そこには見知らぬ建物が建っていた。今日は狼と二人で行動していた。そして一緒に校舎の玄関を出たはずの他の生徒は誰もいない。

背後の建物は、大体校舎くらいだろうか。

そして前方にも三軒同じような建物が建っていた。

しげしげと観察して気付く。それは他の三校。西部高校。北斗女学院。南十字星高校とまったく同じ配置だということに。

しかし、その周囲には建物らしい建物は一軒も建っていない。ただ生い茂る背丈の高い草の荒野だ。

地平線の向こうに木立が見える。

「あそこまで行って見るか？」

狼の提案に、かほるは首を振った。何が出てくるかわからないし、建物があれば最低の風雨はしのげる。

「いや、この建物の中を探ってみよう」

扉を開ければ、やっぱりそこは玄関だったりしなかった。もう見慣れてしまった下駄箱の列やかさたてなどはまったく見当たらない。代わりに木製の、何に使うか意味不明の道具が並んでいる。

「これは、馬を繋ぐ道具じゃないか？」

狼がそう呟く。

よく見れば、馬の鞍かもしれないものが付近に積んである。

「学校の近くに、馬で歩く場所なんかなかったよな」

「当然だ、確か競馬場もなかったはずだぞ」

それ以外にも雑多なものがつんであり、どうやら、ここは、知らないものをしまっておく倉庫のようなものらしいと結論付けた。

「どうやらとうとう東西南北の怪奇現象に巻き込まれたらしいな」  
狼の言葉に、かほるも頷く。

しかし、以前巻き込まれた、博次や狼以外の友人から聞いた話は、階段を上っていたはずなのに、二階から一階に出たという実に地味なものだった。

こんな今まで見たことも聞いたこともない場所に放り出されたという派手なものではなかった。

「人を探すか？」

狼の言葉にかほるは思わず考え込んだ。

「もし、人がいても、はたして、日本語が通じるだろうか？」

狼のこめかみに冷や汗が伝ったのがわかった。

ここはもしかして日本じゃないのだろうか。一瞬にして遠い外国に飛ばされたのでは。

だとすれば不法入国。不法出国。これでは立派な犯罪者だ。

「外国くらいなら、まだいいかもしれない」

狼の言葉に、かほるは目を瞬かせた。

「異次元ということはないよな」

かほるは笑えなかった。校舎から出ただけで、はるかな異次元に落ちる。或いは遠い外国に飛ばされる。どっちもどっちだが、同じ地球上であるならば、外国のほうがましな気がした

探検中に襲われました。

まず調べるなら手近の建物、それから残る三つの建物を調べよう、二人はそれで合意した。

最初に入った入り口以外にも入り口があるようなのでそこからも入ってみる。

おそらくさっきの入り口は、納戸の入り口で、ここが正規の玄関だとかほるたちは判断した。

扉には鍵がかかっていなかった。

玄関といっても、靴を脱ぐ場所ではないようだ。下駄箱というものが存在しない。

ホールになつた場所から、まっすぐに廊下が伸び、その向こうは二つに分かれた廊下だった。

「二手に分かれるか、一緒に行動する稼動する？」

二つに分かれた廊下の場所まで来ると、二人はそのまま顔を見合わせた。

「とりあえず、離れないほうがいいな」

狼はそう判断した。なんといいつてもこの建物は後者とどっこい野規模だ、下手に迷子になられたら、厄介だ。

かほるも、そう考えた。相手の方向感覚は知らないが、それでも分かれて迷子になる可能性を無視することはできない。

二人はコイントスで、進む方向を決めると、そのまま通路が分かれたら右、と決めて進んだ。

最初から右と決めておけば、帰るときはひたすら左に曲がるだけですむという合理性を追求した形だった。

石を組んで作り上げた建物のようなだった。ところどころ、木の枠のようなものが見えたが、ないそうに気を使って漆喰や壁土を塗ったような形跡はなかった。

「本当に人の住むところか自信なくなってきた」  
かほるはそう呟いた。

その時、何かが落ちる物音がした。振り返った二人の前に、刃渡りの長い刃物を持った男が立っているのが見えた。

髪と瞳は黒い、一見すると東洋人のように見えるが、そのわりに妙に堀が深い気もする。

そこまで見て取った二人はそのまま、相手に飛び掛っていた。凶器を携えた相手に無謀とは思わなかった。

こつという場合、背中を向けて逃げるのも危険だ。

それならば二人係という数の有利に頼ろうと判断した。

かほるは喧嘩の場数は相当踏んでいた。

一見すると普通の高校生だが、いかにも不良といった風采の人間も、かほるを見ればこそそこそと逃げる。

そして、かほるにとつて幸運なことに、一緒にいた狼もそこそこ場数を踏んでいたということだ。

左右から両腕を抑えるという形で男を取り押さえると、かほるは腕をねじって刃物を取り上げ、向こうに放り投げた。

相手の背中に馬乗りになる形で、押さえ込む。

「思ったより、やるな」

「そりゃ、この名前だから、そのせいでしょうっちゅう喧嘩沙汰でさ」  
かほるはむなしく笑う。

何故よりによつてかほるなのだ、せめて、かおるにしてくれれば。そんなことを思つて親を呪つてしまふかほるだった。

東村高校は男子校だ。当然かほるもれっきとした男だった。

探検中に襲われました。(後書き)

別に女とは一言も言ってませんよ。言い訳。

## 懐かしい言葉

思いつきり腕をねじり上げられて男がけたたましくわめき散らす。その言葉はかほるにとつて整合性のあるものだった。

「こいつ、英語をしゃべっている、どうやらここは地球上のようだぞ狼」

「あんな、こいつの武器をしてみる、たとえ地球上でも、十八世紀以前のイギリスなら、異次元に落ちたのと変わらないじゃないか」  
言われてみれば、この建物の中にも配線らしいものを見た記憶がない。

見渡してもスイッチらしいものもない。いや、よく見れば、壁のくぼみは何かを燃やして明かりにするための場所なのでは。

「どうしよう」

「ええと、英語わかるんなら、こいつ尋問してみるや」  
言われてかほるは肩を逆関節に決めた。

『さつきは何の真似だ』

かほるは小学生の頃からちびっ子英語教室に通っていた。

『王を隠された王を殺すためだ』

王という単語で、かほるは英国史を検索してみた。

隠された王という単語に引っかけられるものは何も見つからなかった。  
「適当な拘束するものは持ってないか？」

狼に訊いても狼は小さく首を振るだけだった。

「じゃ、シャツを脱げ」

奪い取ったシャツで、腕を縛り上げた。

「気絶させるとかできないのか？」

シャツを奪われた狼は寒そうに、身体を抱きしめる。

この場所の気温はやや低い。石造りの建物のせいもあるのだろうけれど。

「王って何だろうね」

「馬鹿にするな、キングぐらい聞き取れる」

狼は胸を張った。しかし、それが聞き取れなかったらそれは十分問題だと思う。

「イギリス史を丸暗記しているわけじゃないからわからないけど、隠された王って誰のことだろう」

「そんなこと、俺が知ってるわけないだろう」

「だからそこで胸を張らないでくれ」

かほるはなんだか疲れて、建物の窓から外を見る。

「一階じゃだめだな、二階以上登れば、遠くまで見えるかな」

「問題は、階段がどこにあるかだ」

建物の外壁から三階以上の高さがあるのは確かだが、未だに階段を見つけていない。

その時、狼が口を開いた。

「どうやら、新手だ」

くすんだ毛織らしい衣服を着た中年男。その男は、二人を見たときたん逃げようとした。

狼が取り押さえる。その時男は叫んだ。

「助けてくれ」

二人は顔を見合わせる。

「十八世紀に、イギリスに日本語を話せる人間は」

「いるわけないと思うんだが」

かほるは、取り押さえる手を思わず緩ませてしまった。

## 大地主

かほるの手が緩んだ隙に男は逃げようとした。それを狼が逃がさない。

「お前は誰だ、どこから来た」

男は窓を指差す。

「向こうの村から」

その言葉に二人は顔を見合わせる。おそらく歩いて辿り着ける位置に日本語が通じる村がある。その事実が彼らにとって福音になる気がした。

「狼、お前金持ってるか？」

かほるの問いかけに狼は首をひねる。

「ここで日本円に何の価値があるんだ」

かほるも日本円しかもっていない。しかし、日本語が通じる相手なら適当に言いくるめて日本円で買物物が可能かもしれないと思いが当たった。

つまり詐欺のようなものだ。

「お前な」

狼の視線が白くなる。

「それじゃ他に食い物を手に入れるあてはあるのか」

「例えば地道に働くとか」

それを考えたが、そもそも仕事をさせてもらえるかどうかかわからない。もし夕食と引き換えに、薪割りをしろといわれたらたぶん自分はするような気はしたが。

「それなら、この建物全部調べて食料が無いか確かめよう」

狼の提案はよさそうに見えた。しかし問題は今まで歩き回っていて、いまだ食料らしきものは見つかっていないのだ。

「あの、俺はアルマ様に頼まれて迎えに来た」



考え込んでいた二人は、思わず問い返した。

「アルマ様って誰だ？」

「この辺一帯の土地の持ち主だ」

この辺というのがどれほどの面積なのか不明だが、土地持ちなら相応の金持ちだろうと判断する。

「迎えに来たといったな、それじゃお前がそのアルマ様とやらのもとに連れて行くということか？」

狼の問いに男は何度も首を振って答える。

「それじゃ、あいつは一体誰だ」

そう言っただけで最初に縛り上げた男を指差す。

「おそらく大陸にある、本国からきたのだと思う」

かほるはイギリス史を思い出す。

確かイギリスはユーラシア大陸に飛び地のような土地を持っていてそれがジャンヌ・ダルクの出てくる薔薇戦争の引き金になったんだっけ。

そんな歴史知識も、目の前の男が日本語をしゃべるという事実の前には役に立たないと言われているに等しい。

薔薇戦争は関係なさそうだとかほるは判断した。

男は大陸が本国だと言った。薔薇戦争の時代のイギリスでは、やっぱり本国はブリテン島だったはずだ。

「それじゃ俺達をアルマ様のところとやらに連れて行ってもらうか」

かほるがそう言うと、男はコクコクと頷いた。

狼が先に拘束した相手を担ぎ上げた。

「連れて行くのか？」

「これについての話も聞きたいしな」

狼の言葉にかほるは頷き先に立っていく男の背中を追った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1073z/>

---

東西南北物語

2012年1月8日23時53分発行